

### 《特集 『高僧伝』『続高僧伝』》

日本古写経本『続高僧伝』／池 麗梅

岩屋寺高僧伝頭注—引書考証ならびに切韻系韻書考—／佐藤 礼子

### 《古写経紹介・その九／その十》

鶴見大学蔵石山寺一切経本『続高僧伝』巻八／池 麗梅

本学日本古写経研究所蔵『続高僧伝』巻二十二／上杉 智英

### 《調査日記》

佼成図書文書館／南 宏信

### 《寺院紹介》

岩屋寺／上杉 智英

### 《「日本古写経を利用した仏典研究への助成」成果紹介》

日本古写経を用いた『大灌頂経』の研究／伍 小劫

### 今後の予定

平成26年度の予定は以下の通りです。

◇公開研究会・公開シンポジウム◇  
5月10日と11月8日に公開研究会を、7月26・27日に公開シンポジウムを、共に本学春日講堂にて開催予定です。

### 既刊書

○『JAVAVI』8号(非売品)

本書は本学日本古写経研究所のホームページ上からダウンロードできます。バックナンバーを希望される方は下記連絡先にお知らせ下さい。

○日本古写経善本叢刊(非売品)

第1輯『玄應撰一切経音義二十五卷』

第2輯『大乘起信論』

第3輯『金剛寺藏 觀無量壽經 無量壽經優婆塞舍願生偈註卷下』

第4輯『集諸経禮懺儀卷下』

第5輯『書院部藏 無量壽經記』

身延文庫藏 無量壽經述記』

第6輯『金剛寺藏 寶篋印陀羅尼經』

○『日本現存八種一切経対照目録』(非売品)

本書は本学日本古写経研究所のホームページ上からダウンロードできます。

○『佛教文献と文學 日臺共同ワークショップ ショップの記録 2007』(非売品)

○愛知縣新城市徳蓮寺古寫経調査報告書 徳蓮寺の古寫経』(非売品)

○『古写経研究の最前線—シンポジウム講演資料集—』(非売品)



### スタッフ紹介

研究代表者

落合俊典(本学教授)

研究分担者

アレックス・フロリン(本学教授)

藤井教公(本学教授)

赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部副部長 上席研究員)

高田時雄(京都大学人文科学研究所教授)

金水 敏(大阪大学大学院教授)

牧野和夫(実践女子大学教授)

本井牧子(筑波大学助教)

林寺正俊(北海道大学准教授)

三宅徹誠(元興寺文化財研究所嘱託研究員)

学内研究協力者

今西順吉(本学教授・学長)

津田眞一(本学教授)

末木康弘(本学附属図書館副館長)

齊藤達也(本学附属図書館)

堀伸一郎(本学附属国際仏教学研究所副所長)

山野千恵子

(本学附属日本古写経研究所非常勤研究員)

赤塚祐道・小島裕子・田戸大智

(本学附属日本古写経研究所特任研究員)

その他、学外研究協力者多数。

プロジェクト研究員(PD)

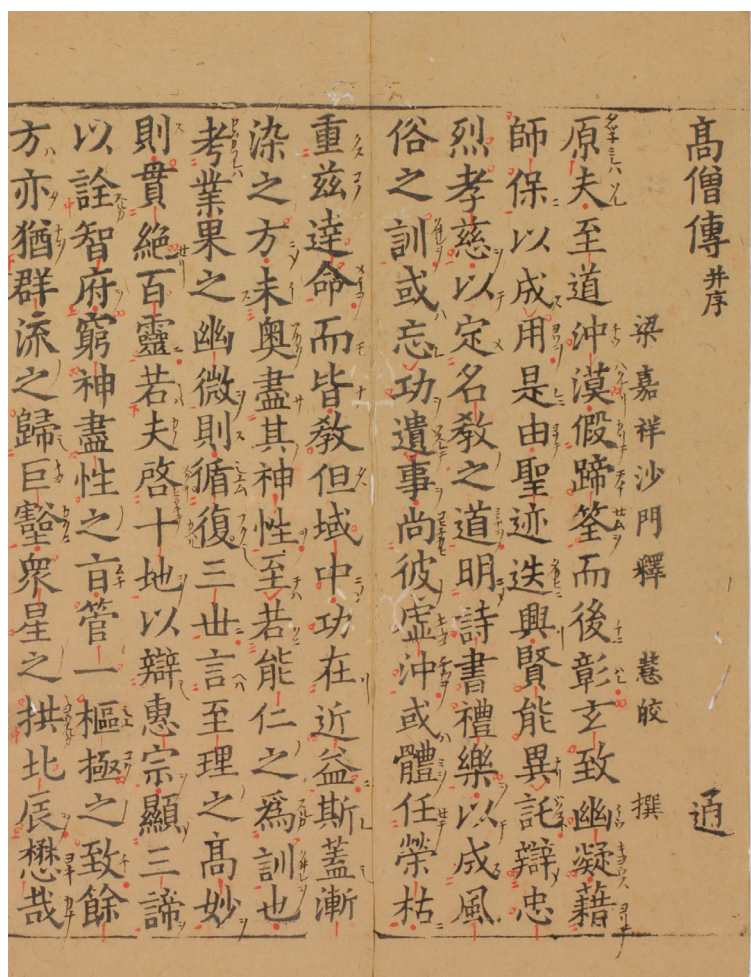
上杉智英・南 宏信・楊 婷婷

プロジェクト研究補助員(RA)

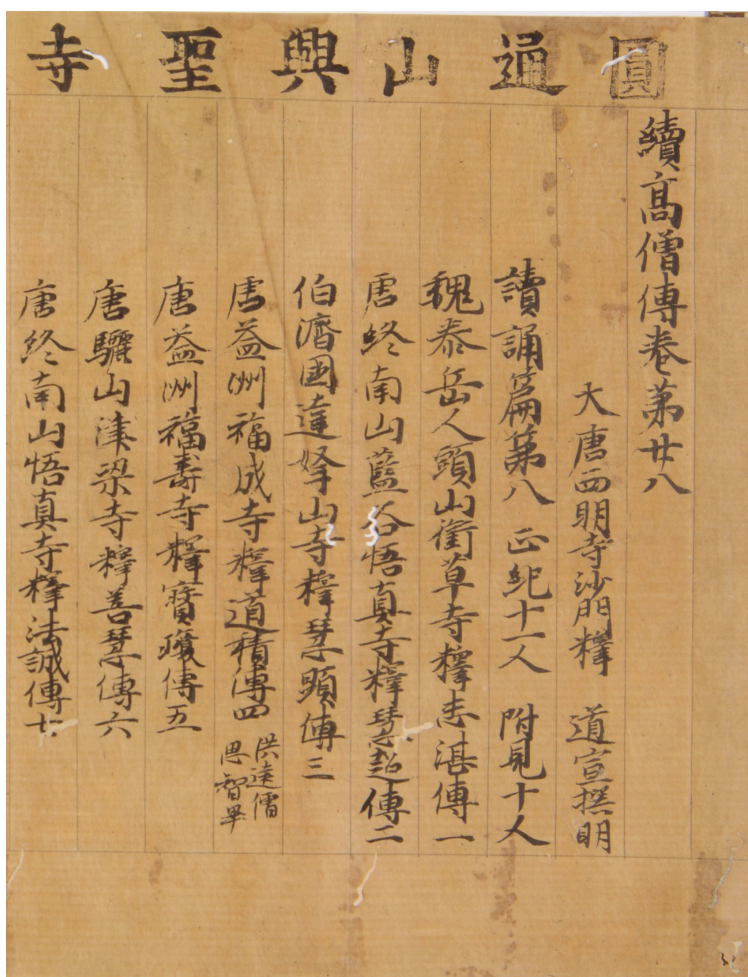
奥村元康

(平成25年12月現在)

CONTENTS	
Toshinori OCHIAI, 'Tsumisha' Pronunciation: Notes on the Wu (Southern China) Pronunciation of the Chinese Characters Used in Japan	1
Limei CHI, The <i>Xu gao seng zhuan</i> in Old Japanese Manuscripts	3
Reiko SATO, Marginal Notes in the <i>Gao seng zhuan</i> Manuscript Preserved at the Iwaya Temple	5
Limei CHI, The <i>Xu gao seng zhuan</i> Manuscript, Scroll VIII, of the Ishiyamadera Collection, preserved at the Tsurumi University	7
Tomofusa UESUGI, The <i>Xu gao seng zhuan</i> Manuscript, Scroll XXII, Preserved in the International College for Postgraduate Buddhist Studies	8
Hironobu MINAMI, Kosei Library and Archives: Manuscript Research Notes	9
Tomofusa UESUGI, The Iwaya Temple: A Brief Introduction	10
Xiaojie WU, Research on the <i>Da guan ding jing</i> Based upon Old Japanese Manuscripts	11
Book Review	
Hironobu MINAMI, Bibliotheca Codicologica Nipponica V / Yasuko KOJIMA, Bibliotheca Codicologica Nipponica VI:	12
Workshops and Symposia	13
Open Lectures	14
Schedule, Publication, and Project members	15



岩屋寺蔵思溪版『高僧伝』巻一 巻首



興聖寺蔵『続高僧伝』巻二八 巻首

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

Newsletter of the Strategic Research Project for Private Universities Granted by the Ministry of Education of Japan  
'Establishment of the Research Centre for East Asian Buddhist Manuscripts'

いとくら 第9号  
平成26年2月1日発行  
編集・発行 国際仏教学大学院大学  
日本古写経研究所  
〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9  
URL <http://www.icabs.ac.jp>  
E-mail [nihonkoshakyo@icabs.ac.jp](mailto:nihonkoshakyo@icabs.ac.jp)  
印刷 株式会社 高山

ITOKURA Vol.IX  
Published by Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies  
2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan  
© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies 2014  
Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo



# 目次

《巻頭言》		
対馬音	落合 俊典	(1)
《特集『高僧伝』『統高僧伝』》		
古写経本と刊本の交点		
日本古写経本『統高僧伝』	池 麗梅	(3)
頭注にみる中世の学問		
岩屋寺高僧伝頭注一引書考証ならびに切韻系韻書考	佐藤 礼子	(5)
《古写経紹介 その九・その十》		
鶴見大学蔵石山寺一切経本『統高僧伝』巻八	池 麗梅	(7)
本学日本古写経研究所蔵『統高僧伝』巻二十二	上杉 智英	(8)
《調査日記》		
古香堂文庫中の大門寺一切経		
倭成図書文書館	南 宏信	(9)
《寺院紹介》		
「海内稀観之珍籍」を伝える		
岩屋寺	上杉 智英	(10)
《「日本古写経を利用した仏典研究への助成」成果紹介》		
古写経より伺える偽経作成の理由		
日本古写経を用いた『大灌頂経』の研究	伍 小劫	(11)
《新刊紹介》		
日本古寫経善本叢刊第五輯		
『書陵部藏無量壽經記 身延文庫藏無量壽經述記』	南 宏信	(12)
日本古寫経善本叢刊第六輯		
『金剛寺藏 寶篋印陀羅尼經』	小島 裕子	(12)
《活動記録》		
ワークショップ	シンポジウム	
「刊本大藏経と日本古写経」／「宋版大藏経研究の現在」		(13)
公開研究会		(14)
今後の予定・既刊書・スタッフ紹介		(15)

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。

# 対馬音

鎌倉時代の初めころでしょうか、法然上人はお弟子さんにご自身が「阿弥陀経」を説くのに呉音と漢音と和訓の三通りで何度も説講したと述べられております。呉音とか漢音というのは、例えば建立は「こんりゅう」と読みますが、建設は「けんせつ」です。同じ「建」という漢字にも発音の種類があるのです。寺院の建立というように仏教用語は大半が呉音読みとなっております。法然上人の言葉には、実は呉音という箇所が「対馬音」となっています。これは象徴的な言葉です。日本の仏教は直接中国から伝来したのではなく、朝鮮半島から入ってきました。その時の漢字の音が「対馬音」なのです。

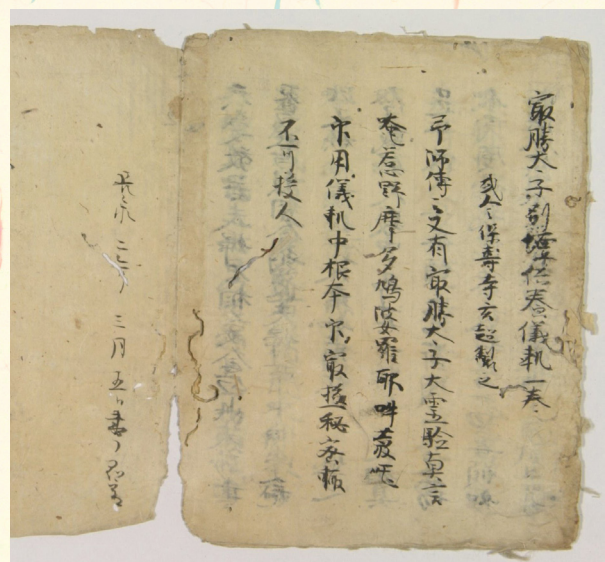
それではどうして朝鮮半島からの漢字音が呉音なのでしょう。これは朝鮮半島の南が中国の南朝(呉・晋・宋・齊・梁・陳の六朝)の影響を受けていたため、仏教寺院でも呉音読みが伝えられたのです。

ことほど左様に古代中世の日本仏教は朝鮮仏教(韓国仏教)と縁が深いのです。新羅仏教はその国力の充実と相まって教思想も円熟していきました。朝鮮仏教の代表的な学僧は新羅僧元曉(元曉)ですが、この方の著述が数多く日本に伝来しております。中には新羅で書写された写本ではないかと言われている『判比量論』(断簡。大谷大学博物館蔵)などもあります。また宮内庁書陵部蔵の新羅玄一撰「無量寿経記」は八世紀の写本ですが、「吉備公」と書かれていますので吉備

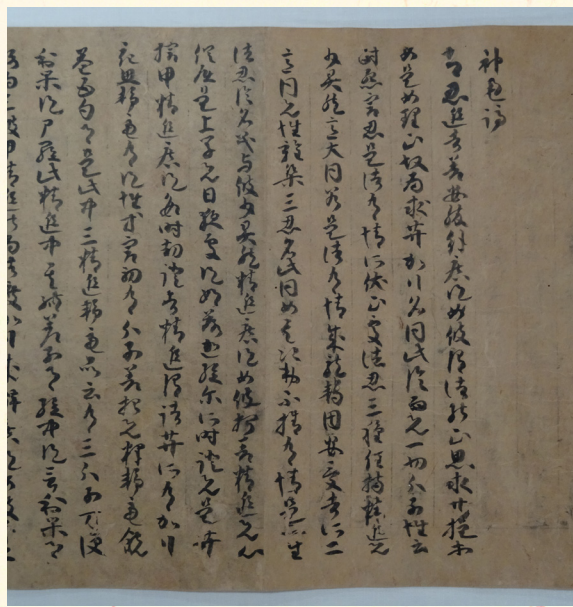
真備(六九五〜七七五)が所蔵されていたのかも知れませんが、

新羅僧が唐に渡って活躍した事例も数多く見られますが、従来知られていなかったことが日本古写経・仏教写本の調査で明らかになってきました。

その一つは新羅僧玄超の著述です。玄超は無名の人物に近いのですが、日本仏教と大いに関係があるのです。弘法大師空海の師匠は恵果阿闍梨ですが、恵果の師匠がこの新羅僧玄超です。驚きですね。玄超に関する文献は大阪の天野山金剛寺から、また名古屋の大須観音真福寺から見出されています。



金剛寺蔵 長承二年(1133)写「最勝太子別壇供養儀軌」奥書



徳川美術館蔵「神通論」巻首(同館図録より転載)

もう一つは名古屋の徳川美術館にある「神通論」です。これは八世紀から九世紀の写本と思われ、新羅僧圓測の著述と想定されます。この写本の一部を見た韓国の学者は驚愕しました。百済の地から出た碑文の文字に「分」の草書体文字がありました。百済の地から出た碑文の文字に「分」の草書体文字がある「神通論」には何か所も散見されます。この書は大谷大学の「判比量論」(重要文化財)と相似しています。新羅から伝来した本かも知れません。今後の研究が楽しみです。(本学プロジェクト「東アジア仏教写本研究拠点の形成」研究代表者)

落合 俊典

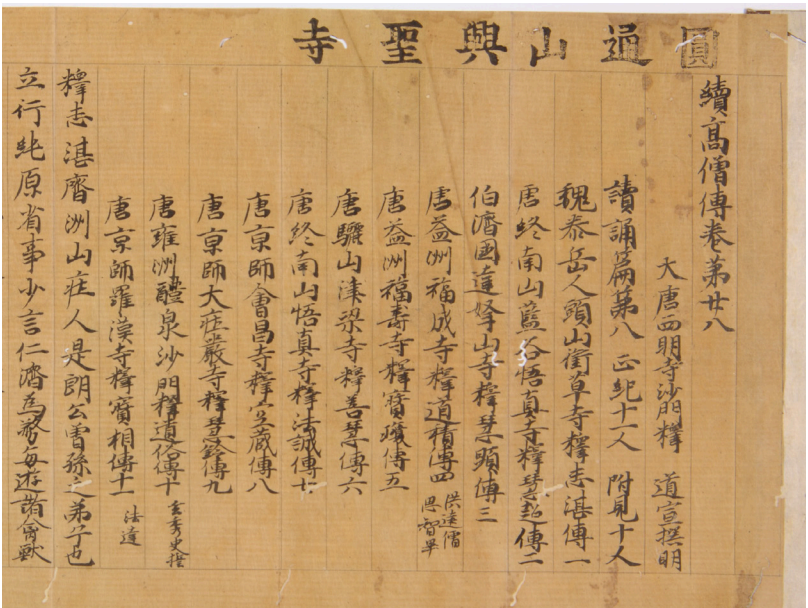


# 日本古写経本『統高僧伝』

池 麗梅

日本古写経本『統高僧伝』は、七四〇年の光明皇后御願文をもつ古写本（京都国立博物館蔵の巻二十八、東大寺所蔵の巻二十九、正倉院所蔵の巻三十の三巻のみ所在判明）を最古とするが、その現存伝本の主体をなすのは平安・鎌倉時代に書写されたものである。平安後期から鎌倉時代にかけて書写された一切経に関しては、それを刊本大蔵経の模写、と短絡的に考えられていた時期もあったが、近年ではその中核を構成する経巻には中国の写本大蔵経時代に起源を求め得るものもあることがすでに判明している。現在、平安時代以降に成立した日本古写経本に関する文献学的研究では、書写年代だけを根拠にそれらの系譜を確定するのではなく、現存諸伝本の比較検討を通して、対象となる伝本が書写された際に使用された底本の種類を特定し、その伝本の系譜を見極めることが必要不可欠な作業となっている。

平安時代以降に書写された一切経に含まれている『統高僧伝』に関しては、興聖寺本・七寺本・金剛寺本に限定して言えば、分科・分巻において刊本大蔵経系統本の開宝蔵系統本および北方系統本と全く同様であるが、収録正伝数は合計三百八十五人



興聖寺本巻二十八 巻首

の系譜に属するものであることは間違いない。しかし特に巻首から同巻最初の正伝に当たる「志湛伝」の本文にかけて、開宝蔵系統本のみと一致する表現が数箇所認められるのである。また、同巻の首題である「統高僧伝巻第廿八」という表記は、刊本大蔵経本の首題であれば何の変哲もないが、日本古写本としてはかなり珍しい表記の仕方であり、今回の天平写経も含めて、実際に筆者がこれまで見てきた九十巻近くの古写経本『統高僧伝』の中で、首題に「巻」という文字が含まれているのは興聖寺本巻二十八のこの箇所のみなのである。

そして、興聖寺本の形態の特異性が最も顕著となるのは、二箇所に見られる撰号においてである。まずは、巻一の冒頭の「大唐西明寺沙門釈道宣撰」という撰号である。この撰号は、「興聖寺本は、早くとも西明寺が建立された高宗朝の顕慶三年（六五八）より以降に書写されたもの、と判定することができる」（藤善二〇〇二：二四六頁）と断言されるほど、かつては興聖寺本あるいはその祖本の成立年代を示唆する根拠として重視されていた。しかし、古写経本『統高僧伝』の中に撰号が記されるのは極めて異例であり、少なくとも筆者が調査中に見てきた古写経本の中には、興聖寺本以外には全く存在しないのである。一方、刊本系統の現存伝本の中では、江南大蔵経本はいずれも「唐釈道宣撰」と記し、「大唐西明寺沙門釈道宣撰」と表記するのは開宝蔵系統本だけなのである。このことから、興聖寺本巻一に唐突に見れる撰号は、初期の開宝蔵系統本に拠って対校を行った結果、興聖寺本（またはその底本）に混入したのではないか、という

（興聖寺本のみ三百八十八人が数えられる。この総数は、『統高僧伝』の序文で告げられた「三百四十人」という数字より四十五人ほど超過しているが、初期開宝蔵系統本の三百九十五人、北方系統本の四百五人、後期開宝蔵系統本の四百十四人、そして江南系統本の四百八十六人という正伝収録数よりはるかに少ないものであり、現存諸本の中ではより古い成立段階の形態を留めるテキストである、と認められる。この収録状況と個々の伝記本文に保存されている素朴な形態などを考え合わせれば、これらの古写経本は、刊本大蔵経の系譜を引き継ぐものではなく、いち早く唐から奈良時代の日本に伝わったことよって中国におけるそれ以降の改変を免れ、平安時代以降の日本で幾たびか転写されたテキストであると考えられる。

この推定を裏づけてくれるのが、京都国立博物館蔵の光明皇后御願経本『統高僧伝』（巻二十八）という七四〇年頃成立の天平写経の存在である。同写本は巻末の一紙だけが同館ホームページの掲載を通じて知られてきたが、筆者が実際にその全容を通覧できたのは、二〇一三年十二月二十七日の調査時である。これは、京都国立博物館の赤尾栄慶先生のご協力によって実現した調査であり、またその際には赤尾先生から様々なご指示を頂いた。この調査後に文字データの分析を実施した結果、興聖寺本・七寺本・金剛寺本などの平安・鎌倉時代に書写された『統高僧伝』巻二十八の内容は、それぞれの中に誤字・脱字・脱文が多数存在するものの、いずれも上記の天平写経の内容を受け継いでいることは疑う余地がないことが改めて確認された。更に、諸刊本との比較を通して明らかになったこととして、同巻の構成ないし収録正伝数は初期開宝蔵本（「提要録」に基づく）と完全に一致しているが、本文中に現れる語句等は江南大蔵経系統本、その中でも特に早期の福州版本のそれにより近接していることが、特筆に値する発見であった。

以前、拙論二〇一三では、『統高僧伝』の全体的構成と正疑いを抱いたのであるが、この疑念を確信に変えたのは、今回の天平写経の調査過程で、興聖寺本巻二十八の首題に続いて記されている「大唐西明寺沙門釈道宣撰明」という一行の発見であった。そして、撰号そのものよりも強く筆者の目を引いたのは、撰号末尾の「明」という一字であった。この「明」字に意味はなく、通常であれば衍字と考えるべき文字である。しかし、この「明」字は、実は千字文番号なのである。千字文を仏典の帙号に用いる例は会昌廢仏の頃すなわち九世紀半ば以前に遡ることはできないのであり、それが八世紀の天平写経に起源を有する日本古写経本にもともとあったとは到底考えられない。更に、拙論二〇一三でも論じたように、同巻は、江南大蔵経では「承」字帙に入っており、「大唐西明寺沙門釈道宣撰」という撰号と「明」という千字文帙号の両方を兼ね備えているのは開宝蔵系統本だけである。このような特に早期の開宝蔵系統本だけと一致するような特徴が、興聖寺本には、ほかにも多数存在しているため、同本が開宝蔵系統の刊本に拠って部分的に校訂されていることは、ほぼ確実と考える。

こうした興聖寺本のユニークさは、とりもなおさず平安時代以降に成立する日本古写経本の性格が極めて複雑であり、特にその起源や系譜を確定するには非常な慎重さが要求されることを示すものである。このような認識に立ちながら、拙論二〇一四Bでは、これまで問題視されてきた「慧遠伝」の内容の変遷についても考察を試みたが、その結果、後期開宝蔵系統本に属する高麗再雕蔵本・金蔵本や江南大蔵経系統の開元本・思溪本と対比すれば、石山寺本・興聖寺本・金剛寺本・七寺本の四本には全体として共通する点が多く認められ、刊本テキストとはやはり一線を画す形態を有するものであることが確認された。また、前述の巻二十八と同様に、日本古写経本の巻八にもまた早期の江南大蔵経系統の開元本とだけ共通する表現や語句が同巻の全体を通じて多数見受けられる。一方、日本古写経諸本間の相互比較を通して見れば、石山寺本と興聖寺本、金

伝収録者数に基づけば、諸刊本の中では、初期開宝蔵系統本が最も古く、そして日本古写経本の形態に近いことを指摘した。これは巻二十八についても該当する。すなわち、後期開宝蔵系統本巻二十八およびすべての江南大蔵経系統本（その巻二十九の後半に相当する）が十四人の正伝を収める一方で、初期開宝蔵系統本は日本古写経本と同様に十一人のみを収録していることから、同本はほかの諸刊本よりも日本古写経本に近接したテキストと言える。ところが、今回の天平写経本の調査から得られた新知見は、構成と正伝収録者数に着目すれば確かに初期開宝蔵系統本が日本古写経本により近いことになるが、しかしながら、本文中に現れる語句等に関して言えば、むしろ福州版という江南の私版大蔵経本のほうが日本古写経本との間に看過し難い共通点を、少なからず有している、ということである。これらの共通点、つまりは開宝蔵系統本と福州版本との間に存在する差異には、『統高僧伝』の成立過程で生じたものだけでなく、底本校訂基準をめぐる勅版大蔵経（開宝蔵）と私版大蔵経（福州版）との違いによって生じたものもあることを考慮しなくてはならないであろう。やはり国家事業である勅版の彫刻には極めて厳格な校訂作業が伴い、その際には誤字・脱字の訂正のみならず、表現や語句等の校訂・修正、更には異体字の統一等が一定の規準に沿って厳しく行われたため、全体としては底本の構成と形態を保全しながらも、福州版等の私版大蔵経と比べると、個々の文字表記や語句等は底本のそれをそのまま採用するのではなく、開宝蔵独自の規準や格調に適合するものに変えた場合もあったかもしれない。

興聖寺本には、初期開宝蔵本を校本にしたと考えられる部分的な修訂・増補が散在していることを拙論二〇一三二二〇一四Bにて指摘してきたが、今回の調査の結果、それと同様の現象が巻二十八においても生じていることが確認された。前述したように、興聖寺本巻二十八は、誤字・脱字が多くあるものの、収録者数や全体的内容に関しては上記の天平写経と同ー剛寺本と七寺本と非常に密接な関係にあることは明らかで、それぞれ同一の伝本の系譜を引き継ぐものと考えて間違いないだろう。なお、この二つのグループを分ける最も顕著な差異は、とりわけ「慧遠伝」の対論部分に集中的に存在していて、ここでも石山寺本と興聖寺本は初期開宝蔵系統本・「広弘明集」・「集古今仏道論衡」と共通する表現や語句を十箇所にわたり採用している。一方、金剛寺本と七寺本は数箇所の表現や語句において開元本との共通性を示すに過ぎず、両者の相違が際立つ結果となった。この事実からも、興聖寺本・石山寺本は、やはり初期開宝蔵系統本に基づく校訂をなされていると考えるのである。もし興聖寺本の成立過程で開宝蔵本に基づく校訂が加えられたという事実を視野に入れずに、現状のままの興聖寺本を一つの基準として『統高僧伝』という文献の成立過程を想定し、それによって『統高僧伝』の成立年代を決定することには無理があると考ええる。興聖寺本と、ほかの日本古写経本および刊本大蔵経諸本との比較校異を重ねて、慎重を期すべきであると考えるのである。しかし、このような性格をもつ興聖寺本は、角度を変えてみれば、まさに日本古写経本と刊本大蔵経本の両方の特徴を具えた文献であると言えることができるのであって、成立の時代や地域をそれぞれ異にする二系統のテキストが交差する地点に位置する類稀な文献なのである。

拙論二〇一三「『統高僧伝』研究序説―刊本大蔵経本を中心として」  
〔鶴見大学仏教文化研究所紀要〕第十八号、二〇一三（二五八頁）。  
拙論二〇一四A「興聖寺本『統高僧伝』―刊本大蔵経本と日本古写経本との交差―」、日本古写経善本叢刊第八輯『統高僧伝 巻四 卷六』。拙論二〇一四B「石山寺一切経本『統高僧伝』の系譜―鶴見大学蔵巻八に関する所見―」、拙著『鶴見大学仏教文化研究所モグラフィシリーズⅠ・石山寺一切経本『統高僧伝』巻八―翻刻と書誌学的研究―」（鶴見大学仏教文化研究所、二〇一四年二月）、五五―八〇頁。  
藤善眞澄二〇〇二『道宣伝の研究』、京都大学学術出版会。

（鶴見大学仏教文化研究所 准教授）



## 岩屋寺高僧伝頭注

— 引書考証ならびに切韻系韻書考 —

佐藤 礼子

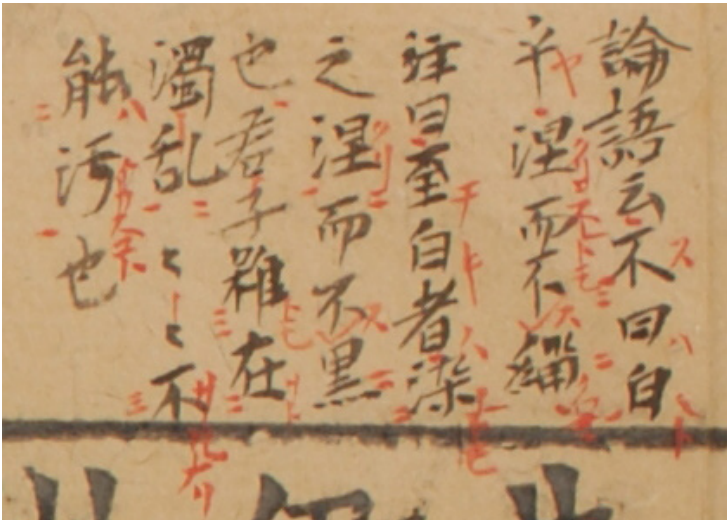
岩屋寺高僧伝と加注した人物

愛知県知多郡南知多町の山深い幽邃の地に、霊亀元年、行基の創建にかかるという真言宗大慈山岩屋寺がある。八角輪蔵を備えた木造の経蔵を残す境内には、昭和十四年に国宝指定された南宋思溪版一切経が、当時新たに建造されたコンクリート製の堅牢な収蔵庫におさめられ、今に至るまで大切に守られている。

昭和十年、小野玄妙博士による一切経悉皆調査、その後の数次に渡る調査成果を公開する形で、翌年十一月、上野寛永寺で行われた東京大蔵会主催「第二十二回大蔵会」にて、岩屋寺の書人や奥書等を持つ重要な経巻が紹介されたが、その中にも、本小文で紹介する『高僧伝』十四巻は含まれていた。<sup>[1]</sup>

『高僧伝』を含む岩屋寺思溪版一切経は、南宋の淳祐年間（一二四一―一五二）の修補後のもので、少なくともそれ以降、一二八一年までの間に我が国へ将来されたという。<sup>[2]</sup>それは『高僧伝』巻五、七、十、十二、十三、十四の巻末に附された准后法助の識語より明らかとなる。そこには、法助が開田莊（もとは父九条道家の所領、相伝して仁和寺の門跡領となっていた）の遠所別院に退隠していたらようどその頃、弘安四年（二二八二）の五月十九日から六月二十八日の約四十日の間に披読した旨が記されている。

また、巻十四、永仁元年（二二九三）の恵林房経弁の手になる奥書に、「此伝一部十四巻、桂大納言入道殿自筆之点本也」云々と



巻7釈曇鑿伝の頭注にみえる『論語』陽貨篇

陸法言一条 郭知玄 四条 麻杲 二条 韓知十二 条

武玄之三条 釈氏 四条 薛岫 四条 孫愔 五条

祝尚丘 一条

があり、その多くが唐代の切韻系韻書である。内容を見ると、反切を示すのは二条のみ（巻六僧鑿伝、巻十杯度伝の頭注）、ほかはみな語義解釈に専心する。このうち、一度の引用に二家の切韻を採用する例は四条、次の如くである。

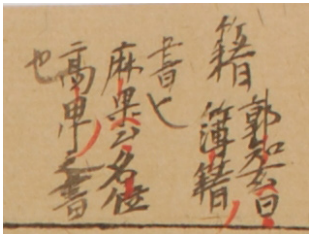
籍、郭知玄曰、簿籍書也。

麻杲云、名位高卑之書也。

（巻七・釈僧導伝）

「籍」とは、郭知玄の「切韻」に、「簿とは簿書（公式文書）である」という。

麻杲「切韻」には、「官職と地位のランクを記した文書のこと」という。



巻7釈僧導伝 頭注

これは、切韻佚文を蒐集した「上田一九八四」に、信瑞「浄土三部経音義集」巻一（大正蔵五七冊、三八五下）からの採録として見<sup>[3]</sup>え、次のように完全に一致する。

「群籍」、東宮切韻曰、陸法言云、籍、秦昔反。郭知玄云、簿籍、書也。釈氏云、戸書也。武玄之云、古者、無紙以竹殺青為簿籍、及写書。麻杲云、六籍六経、周礼小行人掌邦（國）賓客之礼籍。礼籍者、名位高（現行本作尊）卑之書。祝尚丘云、通籍二尺、竹牒也。又凡書於簡札、皆曰籍（傍点筆者）

ある。これは、二二八一年の法助奥書時点から高山寺に施入されるまでの十二年間に、桂大納言入道藤原光頼（一二四一―一二七三）自筆本を祖本として朱墨訓が移点されたと、経弁が理解していたことを物語る。つまり、頭注を含む朱墨点は、平安後期の古形を伝えるものと考えられるのである。頭注を記し施点した人物は明らかでないが、祖本の存在を前提としても、相当に博学で、漢籍を涉獵しうる地位にある人物であった。以下に論じる頭注部分の引用外典の豊富さからもそれは理解できるだろう。

岩屋寺高僧伝頭注所引外典

頭注は全巻に涉つて墨筆にて書かれ、朱による加点がなされる。本文の朱墨訓や書入とは別筆。内容は主に語義解釈、反切、本文の文字勘誤。これらのために引用された漢籍は（書名を記さないものも含め）次の通り。

周易三条 毛詩（注含む）五条 周礼二条 礼記三条

左伝一条 呂氏春秋（高誘注）一条 論語四条

切韻二十二条 韻略三条 広韻一条 字書二条 史記一条

孫卿子 漢書芸文志（二書は「仇池筆記」からの孫引）一条

晋書一条 宋書一条 南史一条 老子経一条

文選序一条

総じて十八種、延べ五十四条、なかでも切韻系韻書からの引用の多さは注目に値する。まずは頭注所引外典の特徴的なものを三点、紹介しよう。

（一）『論語』

四条が引用される『論語』は、注を記す二条によって、何晏集解本系統であると知られる。いずれも朱による詳細な訓が附され、鎌倉以降の写本しか現存しない『論語』の平安期の読みを今に伝える資料の一つと言える。（石塚晴通先生ご教示。惜しむらくは四条いずれも、関係性のより高い高山寺本諸論語との一致を見ないため、その教学の系統を判別できない。

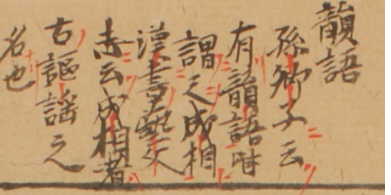
また、残りの三条の配列は、「韓知十・武玄之（巻四支通伝）／「薛岫・孫愔」（巻六僧鑿伝）／「郭知玄・麻杲」（巻十杯度伝）」の如くで、これは、平安時代の音韻書『東宮切韻』について記した禪覚（二一七四―二二一〇）『三僧記』「入東宮切韻十三家」に記される配列順とすべて合致する。さらに、上述の著者名を記す切韻系韻書もみなこの十三家の中に含まれるのに対し、『三僧記』に「不入」とされた三家の切韻は一切引用されない。よって、頭注に引用された著者名を冠する各種切韻は、いずれも『東宮切韻』からの孫引と考えられる。

次に、出典を記さず語義解釈のみを記す条もまた、韻書を用いた形跡がある。明らかに『東宮切韻』から引用した例としては、巻八「釈智林伝」頭注に、「詮、具也。具說事理也。」が、「東宮切韻」に「釈氏云、擇。薛岫云、具也。說事理曰詮。麻杲云、理也。（傍点筆者）」と一致をみる。同様の事例は他にもいくつかあるが、すべてが『東宮切韻』に基づくわけではなく、「考声切韻」、「韻英」、「広韻」などの他韻書から引用したらしい事例もある。語義解釈を頭注に記すにあたり、加注者がいずれの韻書を見たか特定するのは、唐代切韻系韻書が完本として現存しない今、困難を極める。ただ、いずれにしても、当時「A、B也（AとはBである）」式の辞書的な語義を調べるには、韻書を見るのが最も手っ取り早かった。おそらく加注者は、『東宮切韻』、『広韻』を始めとする韻書を多数閲覧できる環境におり、それを手元に置きつつ、適宜妥当なものを利用したと考えられる。

ところで、韻書とは本来、漢字を韻によつて分類しその音義を示したもので、その本来の意味で『高僧伝』頭注に用いられたのもまた、切韻系韻書であつたらしい。頭注には『広韻』からの引用一則（巻五・竺道壹伝）もあるものの、反切を示した七条のうち六条は、「〇〇反」と表記され、『広韻』がその音を示す際に用いる「〇〇切」の表記とは異なるからである。ただ、語義自体は『広韻』と一致するものも多いから、『広韻』を参照した可能性も否定はできないが、同一部分の『東宮切韻』佚文が存しないため、唐代

（二）『仇池筆記』巻上「成相」からの引用

『高僧伝』巻十邵碩伝の頭注に、「荀子」と『漢書』芸文志を引く。だがこれは蘇東坡の作と伝えられる『仇池筆記』からの孫引と覚しく<sup>[3]</sup>、「荀子」成相篇には当該文が無い。頭注に引く『毛詩』「左伝」『礼記』の引用条が、韻書等からの孫引である可能性を否定できないのに対して、加注者は『仇池筆記』については



巻10邵碩伝 頭注

直に見た上で、頭注に記したらしい。東坡詩が五山僧らによく読まれたのは周知の事実だが、本書のような筆記も単行書として将来されていたかは明らかでなかった。あるいは本書を節略した曾慥「類説」巻九を用いたかもしれないが、いずれにせよ、伝蘇東坡作品の比較的早い時期の将来を示すものと言える。

（三）『老子』のヲコト点

『高僧伝』巻十一習禅篇の論の頭注に、『老子』重徳第二十六の「静ハ躁カ君為リ云々」が引用され、「静」、「躁」二字にヲコト点（経伝点）が記される。頭注にヲコト点が附されるのはこの条のみであるため、これは祖本（藤原光頼加点本）から移点した結果と推測され、祖本の存在を示す貴重な例といえる。



巻11習禅篇 論の頭注

韻書ならびに切韻系韻書

韻書の引用の多さは、本頭注の特色であり、書名著者名を冠する三十一条のほか、語義解釈を示す多くの部分が、実は韻書から引用されている。著者名を冠するものに、切韻諸書の反切や語釈を、『広韻』のそれと比較して明らかにする術はない。しかし、そもそも『広韻』は孫愔切韻の増補改訂版であるから、『東宮切韻』にもかかる字義や反切があつたと想像することは可能ではある。

本『高僧伝』と同様に、未だ経蔵や書庫に眠る書のなかには、『東宮切韻』を引用したものが存しているかもしれない。それらの佚文にこの部分の反切や解釈が保存されていたならば、本『高僧伝』加注者が反切を記す際にいずれの韻書を用いたのか、より明確になるろう。唐代韻書の佚文の発見と今後の研究の進展を期待したい。

以上、岩屋寺高僧伝頭注の切韻系韻書を中心に雑駁な検討を加えてみたが、確かなことは、注を加えるに際し、『東宮切韻』を始めとして、唐代の切韻系諸書がかなり頻繁に参照されたらしい事実である。しかもその利用には、語義説明という辞書的な価値により重きが置かれていた。

頭注や本文にふられた訓点や仮名は、この注が鎌倉期に附されたものであることを伝えるが、しかしその内容を具体的に見ていくと、より古い平安期の古形を留めたものが散見される。その意味でも、本頭注の意義は誠に大きいと言わねばならない。尚、頭注には朱による「〇」「一」等の庵点（科段符号）が認められるものの、この記号と本文との関係は一貫性に乏しい。今後の課題としたい。

- <sup>[1]</sup>昭和十一年十一月八日第二十二回大蔵会展覧目録 大塚巧芸社、三二―三三頁。
- <sup>[2]</sup>上杉智英「寺院紹介 岩屋寺」、本誌一〇頁。
- <sup>[3]</sup>『仇池筆記』巻上「論文選」孫卿子書有韻語者、其言鄙近、多云成相、莫曉其義。前漢芸文志詩賦類中有成相雜詞十一篇、則成相古讜語之名也。『四庫全書』本）
- <sup>[4]</sup>「麻杲」は正しくは「麻杲」、本写本は明らかに「杲」と書写する。
- <sup>[5]</sup>上田正「切韻逸文の研究汲古書院一九八四、三七八頁、入声十七昔韻。
- <sup>[6]</sup>『三僧記』「入東宮切韻十三家」の著者名を配列順に挙げると、陸法言、郭知玄、釈氏、長孫納言、韓知十、武玄之、薛岫、麻杲、王仁岫、祝尚丘、孫愔、孫愔、沙門清徹の十三家。「不入」は二家で、王存文（蔣？魴盧（川瀬）一馬「古字書の研究」大日本雄弁会講談社、一九五六、五六頁。また『三僧記』については、「仁和寺研究」第一輯、古代学協会、一九九九所載の竹屋論文、古藤論文を参照。）
- <sup>[7]</sup> 同注5、九三頁。

（京都大学 非常勤講師）



鶴見大学蔵石山寺一切経本

# 『続高僧伝』 卷八

池 麗梅

現在は古義真言宗に属する石山寺は、奈良時代の天平十九年

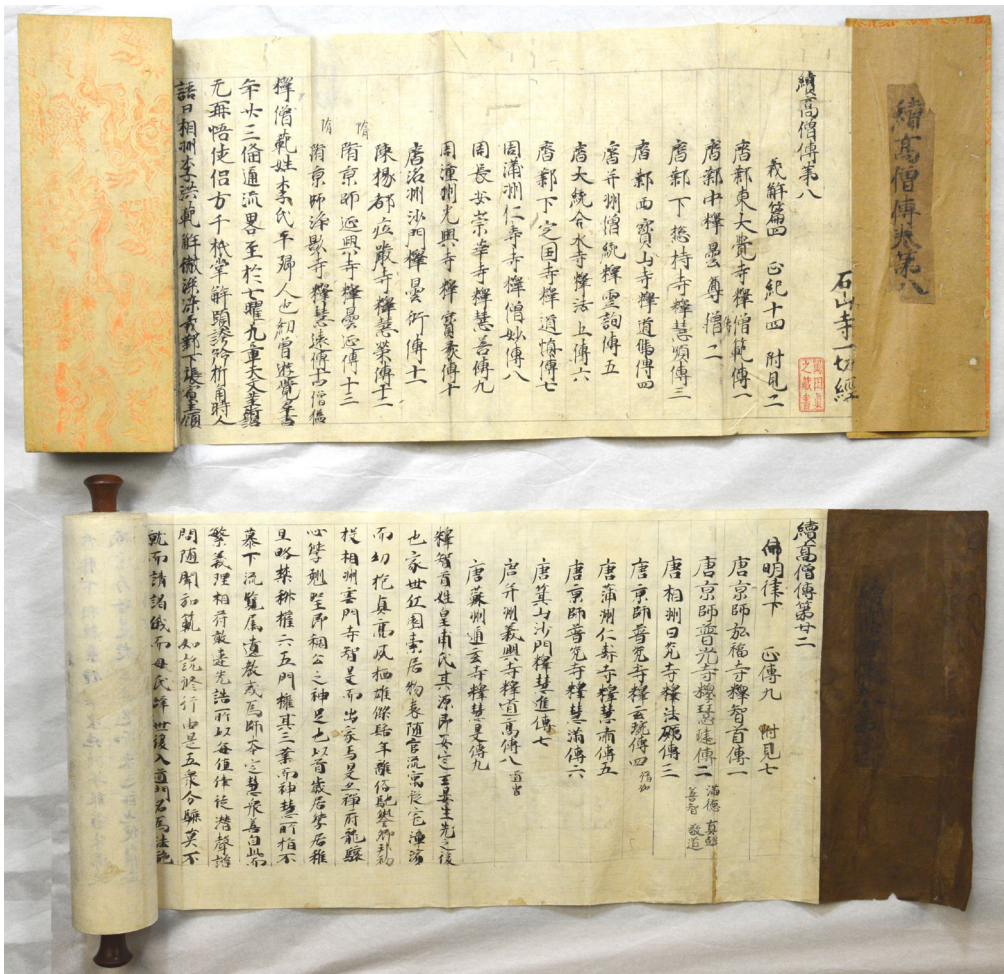
(七四七)、東大寺の開山でもある良弁僧正(六八九〜七七四)が草創したと伝えられる古刹である。ここに所蔵される古い歴史と優れた教学伝統を物語る多種多様な文化財の中に、国宝指定の薫聖教、昭和二十八年に重要文化財指定を受けた一切経等がある。

そのうち、石山寺一切経は、奈良時代から室町時代にかけて書写された写経を主体とする經典群であり、総数は四四八五帖にも及ぶ。その約三分の二を占めるのは平安時代院政期の写経、中でも特に多いのは念西の発願勸進により、久安四年(一一四八)から保元年間(一一五六〜一一五九)までに書写されたものである。石山寺所蔵品のほか、天理図書館・京都国立博物館・唐招提寺、個人

収集家所蔵など坊間に伝存するものも少なくない。石山寺文化財総合調査団編の石山寺一切経目録と補遺を見る限り、石山寺には『続高僧伝』が巻十四の一点だけ現存しており、そのほか目下所在が判明しているものは、鶴見大学所蔵の巻八、国文学研究資料館所蔵の巻十六、国際仏教学大学院大学所蔵の巻二十二との三点のみである。

鶴見大学所蔵の石山寺一切経本『続高僧伝』巻八は折本装で、木版朱刷雲竜文の表紙には「続高僧伝巻第八」という外題の書かれた題箋が貼りついている。このような特徴をもつ装幀は、もと巻子本であった石山寺一切経の経巻が天明七年(一七八七)に現在の折本装に仕立て直されたものと考えられている。表紙の裏には褐色に染められた料紙が見返しとして貼られており、その上には「続高僧伝巻第八」と書かれている別の題箋が付いている。この見返しと本紙にまたがって「石山寺一切経」という無廓黒印が捺されているのが見える。この印記は、文亀二年(一五〇三)以降、天正七年(一五七九)以前の間に押捺されたものと推定され、黒印が本紙と現在の見返しとにまたがって捺されているのは、「旧表紙を本紙から切り離すことなく、そのまま旧表紙の一部を現表紙裏に貼り付けて見返しとした」からであると言われてい

鶴見大学蔵石山寺一切経本『続高僧伝』巻八



本学日本古写経研究所蔵『続高僧伝』巻二二

る。その左隣には、「岡田眞／之蔵書」という長方形双廓陽刻朱印が捺されている。これは著名な蔵書家である岡田眞之氏の蔵書印であり、それが同巻の巻首に捺されていることから、同巻は一時期同氏の所蔵であったことが推察される。本巻には書写奥書がなく、わずかに「一交了」という校合奥書があるのみである。一紙の長さは概ね

たものらしく、8 cmごとの折目が附いている。また表紙見返しに貼込まれる題箋は、表紙と同一の料紙と考えられる。これは本来外題として表紙に直書きされたものを、折本へ改装するに際し、切り取り見返しへ貼

つけ、別に新たに表紙、外題を附したものと考えられる。つまり本巻は巻子(原装)↓折本(鶴見本と同装)↓卷子(現装)と改装されたことが伺える。

本経巻の由緒を、8 cmごとの折目、表紙見返しに貼込まれる題箋という装幀の特色、並びに書写時期より尋ねると石山寺一切経本に辿り着く。鶴見大学所蔵『続高僧伝』巻八、国文学研究資料館所蔵『続高僧伝』巻十六には、無廓墨印「石山寺一切経」が捺されているが、両巻は上述の装幀の特色を具備するものである。

国際仏教学大学院大学は二〇〇七年、『続高僧伝』巻二十二の古写本を落手しました。本経巻の書誌情報は以下の通り。平安末期写。紙本墨書(楮紙)。卷子本(元経折装)。茶漆撥型軸(後補)。濃茶地表紙(元表紙転用。見返しに元題箋貼込「續高僧傳卷第廿二」)。外題なし。

内題「續高僧傳第廿二／佛明律下 正傳九 附見七」。

ただ本経巻には「石山寺一切経」の捺印が認められない。これは折本から巻子本への改装後に切断されたものと推測される。鶴見大学蔵本、国文学研究資料館蔵本は内題と表紙の紙継ぎの間に一行分(19 cm)の余白があり、そこに「石山寺一切経」印がみえるが、本経巻では内題と表紙の紙継ぎが近接しており余白はない。8 cm幅の折帖にした場合、当然、内題が記される冒頭第一折の幅も8 cmとなる筈であるが、その幅は6.6 cmとなっており、1.4 ㎝幅の切断が確認される。濃茶地表紙も同様に8 cm幅である筈が現装では10.1 cmとなっている。表紙にも折目が附いており、右端2.6 cmを折り込み、その上へ表紙を貼っていたことが糊痕より看取される(同様の折帖の状態にした時、表紙の幅は7.5 cmしかなく、現装の表紙が折

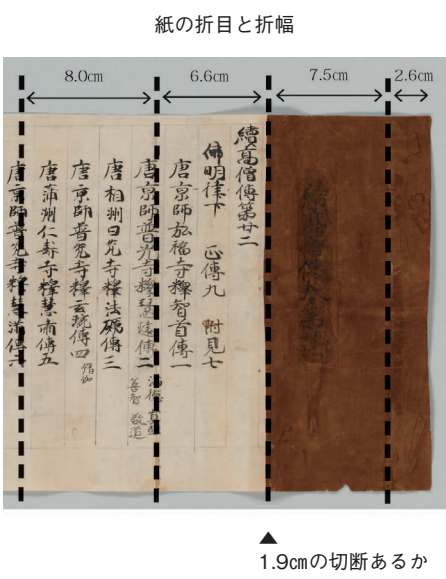
五十一・五種前後で、一紙には二十七行、一行十七字前後の書写規格や本文の筆致や料紙などから、同一一切経の主体をなす院政期後半に石山寺一切経として勸進書写されたものと考えられる。

『続高僧伝』には、南北朝の梁代から七世紀中頃の唐初までの高僧数百人の伝記が「訳経篇」、「義解篇」、「習禪篇」などの十科に分類されている。その中で、「義解篇」の第四に当たる巻八は、北斉の靈詢、法上、隋の曇延、慧遠などおよそ十四人の義解高僧の伝記を収録した重要な一巻である。同巻の現存諸テキストの間に字句の相違が多く存在し、特に最後の「慧遠伝」において顕著な相違が認められている。おそらく、『続高僧伝』巻八のテキスト変遷の過程において、「慧遠伝」を中心に幾たびも修訂がなされたのではなからうか。今後「慧遠伝」に焦点を合わせながら、巻八全体における諸伝本間の異同の傾向とその原因を究明できれば、『続高僧伝』の変遷過程の解明にも一歩近づくことになる。従って、既知の古写本に加え、石山寺一切経本『続高僧伝』巻八が新たに出現したことには、極めて重要な意義があると言えよう。

1. 石山寺所蔵の同一一切経の現存状況は、石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究―一切経篇』(法蔵館、一九七八年)所収の「石山寺一切経第一函(第八〇函)・「石山寺一切経(附属分) 第一函(第七函)」、石山寺の研究・校倉聖教・古文书篇(法蔵館、一九八一年)および「石山寺の研究・深密藏聖教篇下」(法蔵館、一九九二年)所収の「一切経補遺函」によって知られる。
2. 同写本は、現在、鶴見大学図書館の貴重書室に保管されており、その影印・翻刻・解題・論考等は、拙著「鶴見大学仏教文化研究所モノグラフィーズⅠ・石山寺一切経本『続高僧伝』巻八」翻刻と書誌学的研究―(鶴見大学仏教文化研究所、二〇一四年二月)にて公表されている。
3. 田中稔「一九七八」石山寺一切経について、「石山寺の研究―一切経篇」、八八四頁。
4. 田中稔「一九七八」、八八四頁。

(鶴見大学仏教文化研究所准教授)

帖の時より0.5 cm切断されたことが判明する。つまり本経巻は表紙と第一紙の接合箇所において1.9 cm表紙0.5 cm、第一紙1.4 cmを切断するものであるが、「石山寺一切経」印の幅が1.6 cmであること、鶴見大学蔵本、国文学研究資料館蔵本の「石山寺一切経」印が表紙と第一紙にわたって捺されていることを勘案した時、この不自然な切断箇所「石山寺一切経」印を見取ることができよう。



以上、本経巻には奥書、印記等、何らその由緒を明記するものはないが、その装幀より石山寺一切経本の一つとして書写されたものと比定できる。本経は書写後、天明七年(一七八七)頃、尊賢により折本へ改装されているが、その後何時まで石山寺所蔵であったのかは明かではない。今後、鶴見大学蔵巻八、石山寺蔵巻十四、国文学研究資料館蔵巻十六と併せて研究対象とすることにより、石山寺一切経本『続高僧伝』の系譜解明が期待される。

国文学研究資料館蔵本は同館ホームページ掲載のものによった  
[http://base1.nijiac.jp/view/Frame.jsp?DB\\_ID=G0003917KT&C\\_CODE=039-0051\\_二〇一四年二月一二日アクセス](http://base1.nijiac.jp/view/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KT&C_CODE=039-0051_二〇一四年二月一二日アクセス)。本書の存在を池麗梅先生に、石山寺一切経印の切断を南宏信研究員にご教示いただいた。記して感謝の意を表します。

(本学日本古写経研究所主任研究員)

本学日本古写経研究所蔵

# 『続高僧伝』 卷二十一

上杉 智英



## 佼成図書館

### 佼成図書館

昭和二十八（一九五三）年、東京都杉並区に立正佼成会附属の佼成図書館が開設され、平成二十三（二〇一一）年に佼成図書館と統合、現在、佼成図書館として総数二十万冊以上に及ぶ宗教書・仏教書などの図書を所蔵しています。佼成図書館編『佼成図書館善本目録』（一九九五年）によると、蔵書中に大門寺一切経十二巻を含む貴重な古写経が多数あることを確認できます。



佼成図書館 外観

大門寺一切経  
大門寺一切経は、以下の通り各木函に納められています。（一）内は奥書）

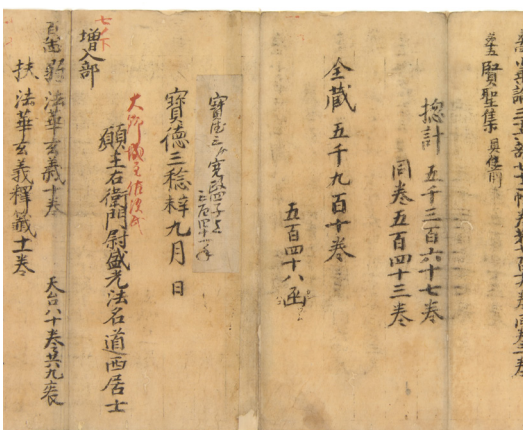
- ①・十誦羯磨比丘要用法 一卷
- ・阿毘達磨順正理論 卷第七十八  
（弘安四年閏七月九日一交了勸進僧長賢／右志者為父師長出離生死往生極樂也）
- ・阿毘達磨藏顯宗論 卷第七  
（二交了／弘安□年壬七月十一日大門寺一切経之内）
- ②・根本説一切有部毘奈耶雜事 卷第十二  
（弘安五年十二月 書寫了／撰津國大門寺一切経内 一校／元禄<sup>辛未</sup>仲春廿二日 一交 佛船）
- ・阿毘達磨發智論 卷第十一  
（大門寺一切経内／弘安七年六月九日 一交畢 勸進僧長賢<sup>卅七歳</sup>）
- ・阿毘達磨大毘婆沙論 卷第六十六
- ・雜阿毘曇心論 卷第五
- ・鞞婆沙論 卷第十四
- ③大般泥洹經 卷第二（願主経尊）
- ④海龍王経 卷上（願主経尊）
- ⑤遺教経論 一卷（願主経尊）
- ⑥阿毘達磨俱舍論 卷第十三（願主経尊）

## 寺院紹介

### 岩屋寺

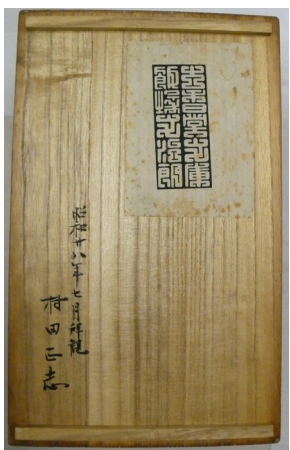
高山寺旧蔵の思溪版大蔵経を今に伝える  
大慈山岩屋寺は愛知県知多郡南知多町に位置する古刹で、寺伝では靈龜元年（七一五）、元正天皇の勅願による行基の創建と伝えられ、江戸時代には徳川家の祈願寺となつてゐる。昭和四十二年（一九七六）天台宗より独立、尾張高野山宗の総本山となる。本尊は千手観音菩薩であり、知多西国三十三所霊場の一番、東海西国三十三ヶ所霊場の十番、知多四国八十八ヶ所霊場の四十三番と多くの信仰を集めている。貴重な文化財を多数所蔵し、一切経五四六三帖、仏具二六帖、大蔵経願文及目録二帖、千賀孫兵衛書状一点が国の重要文化財に指定されている。

この一切経五四八函五四六三帖は、南宋の淳祐年間（一二四〇―一五）に法宝資福禪寺にて刊行された後思溪版（資福蔵）五一五七帖を主体とし、その欠損を補写した写経一九五帖、和刻本一一一帖（『法華玄義』一〇巻、『同釋籤』一一巻、『法華文句』一〇巻、『同記』一七巻、『摩訶止観』一〇巻、『同輔行伝弘決』二二巻、『元亨釋書』三〇巻、『同目錄』一卷）より構成されている。江戸時代写の『大蔵経目録』によれば、「寶徳三稔<sup>辛</sup>九月日 願主右衛門尉盛光法名道西居士」の寄進奥書がみえ、宝徳三年（一四五二）に岩屋寺に施入されたものと考えられる。



大蔵経目録 巻下

①②函の蓋裏には墨書で「昭和廿八年七月拝観／村田正志」とあり、②函の蓋裏には「古香堂文庫／飯塚文治郎」の蔵書印を確認できます（図参照）。その他の蓋裏には昭和四十二年の日付と飯塚氏の署名があるので、二回に渡り木函を作成していることが分かります。



②函の蓋裏

### 古香堂文庫

この大門寺一切経は、小石川図書館や隅外記念本郷図書館に勤務していた飯塚文治郎氏（一九〇四―？）が蒐集したものの一部であり、氏の蔵書は「古香堂文庫」の名称で知られています。彼の死後このコレクションを本図書館が所蔵するに至りました。

飯塚氏が作成した「古写経目録」二冊は、同氏作成の「古写経切解説」二冊と共に、現在本図書館が所蔵しており、約五百巻以上に及ぶ經典と五十二紙の古写経切の蒐集記録を一瞥することができます。

思溪版本には多くの奥書が付されるが、その最初のものとして「弘安四年五月廿八日於開田松窓敬以披覽了／隱老法助」（高僧伝 卷七）と、開田准后法助（二二七―七八四）の披見奥書がみられ、この思溪版が南宋淳祐年間（一二四〇―一五）の補修刊行後、弘安四年（二二八二）には本朝に伝来していたことが確認される。

また「于時永仁元年（二二九三）十二月卅日、一部奉轉読了之。経弁<sup>卅八</sup>」（高僧伝 卷十四）、「康永二年（二三四三）癸正月三日<sup>庚</sup>於高山寺地藏院／奉轉讀畢 金剛佛子高経<sup>六十三</sup>」（大宝積経 卷二）等、京都高山寺十無尺院の三世恵林房経弁（二四六一―二二六二）、第四世了月房高経（二二八一―？）の転読奥書、加點奥書が散見し、高山寺旧蔵であることが伺える。開田院（京都府長岡京市の法助のもとより高山寺へ移った経緯、時期については明かではないが、現在思溪版が

納められている経函（スキ材）の伐採年代が一二八四年と法助の没年に相当することは興味深く、上述の通り永仁元年（二二九三）には経弁により転読されていることを勘案すれば、法助の逝去が契機であったか。思溪版に付された奥書は、従来「伝受類聚抄」の編集「別尊雜記」「曼荼羅集」の書写と、伝受活動を専ら行つたと考えられてきた経弁像や地藏院の創建時期に再考を促す貴重な情報を含んでいる。

補写経巻はその時期より二部に大別される。一つは享徳二年（二四五三）であり、「龍集癸酉享徳二曆林鐘六尾州路岩屋之蔵経 小比丘某甲書」（実相般若波羅蜜経）、「享徳二曆癸酉八月時正於内海大泊雲菴書之」（文殊師利所説般若波羅蜜経）等の奥書が散見する。「大蔵経目録」にみられる宝徳三年（二四五二）との近接を考慮すれば、施入された思溪版の欠帖を補う為に行われたものか。

もう一つは享保二年（二七二七）より享保四年（二七二九）、岩屋寺の本寺である薬師寺密蔵院（愛知県春日井市）の第三十六世、智鋒による補写である。智鋒は「修補大蔵経願文」と共に「岩屋寺大蔵経制」を記しているが、そこには毎年六月に曝涼すること、經典が破損した場合は速やかに寒漉紙、寒晒糊と黄檗の煎汁で修補すべきこと、門外不出であること等々、經典に対する護持の想いが看取される。また昭和八年（一九三三）には徳富蘇峰が訪れ「南宋板一切経 約五千九百十巻 右海内稀観之珍籍、一冊タリトモ散逸セサル様護

また昭和二十七年・二十八年の消印が押された、返信葉書と手紙が經典と共に納められています。これは大門寺住職添野智光師から飯塚氏に宛てたもので、その内容から推測するに、飯塚氏は大門寺の創建や勸進僧長賢についてなど、奥書の記述について住職に質問していたようでありました。当時東京史料編纂所に勤務していた村田正志氏が昭和二十八年にこの一切経を拝観していることも合わせる

と、大門寺一切経を入手した飯塚氏が、元の所蔵寺院や専門家に問い合わせる当時の状況が垣間見られます。

所蔵者が変わっても大切に保存されてきた一切経の足跡を窺い知れる貴重な事例であります。

### 附記

調査の際には長沼克宗館長並びに佼成図書館御当局に御高配賜りました。ここに記してお礼申し上げます。

### 【参考文献】

- ・「いとくら」二「寺院紹介 西方寺」（二〇〇七年）、同五「寺院紹介 大門寺」（二〇〇九年）
- ・本学蔵「古香堂文庫目録 古写経切解説」
- ・藤原重雄「延慶三年実遍書写本「覚禪鈔」管見」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』五九、二〇一二年）

（南 宏信）



岩屋寺 本堂

持相成り度、茲二希望ヲ開陳シ置クモノ也」と認め、これらに想いと歴代住持、檀信徒のご尽力により現在に護り伝えられている。

調査にあたりご高配を賜りました住職後藤泰真様、並びに総代石黒宏様、山本昂彌様、山本和男様、原田均様、山本澄夫様、石黒嘉久様、原田茂男様、鈴木壯治様に深く感謝の意を表します。

### 【参考文献】

- ・山本鏡之助『岩屋寺誌』（知多郡内海第二尋常小学校、一九三四）
- ・光谷拓実「年輪年代法による一切経箱の年代測定調査」（『公開シンポジウム 宋版大蔵経研究の現在 講演資料集』国際仏教学大学院大学日本古写経研究所、二〇一三）

（上杉智英）



# 日本古写経を用いた『大灌頂経』の研究

伍 小 劼

## 一、『大灌頂経』研究の新展開

『大灌頂経』十二巻本の初出は僧祐『出三藏記集』であり、そこでは巻十二『灌頂拔除過罪生死度経』を、劉宋の僧慧簡の抄経とし、「統命法」が説かれている為、世に流行したとする。本経の形成に関して僧祐は何者かが後の三巻を前の九巻に編輯し、一部十二巻としたことを指摘するが、巻十二以外の訳者、編者については全く言及していない。これ以降、基本的に僧祐の説は継承されるが、費長房に至って、巻十二を慧簡の抄経とみなす外に、詳細不明の『雜録』によって、前九巻が東晋の帛尸梨蜜多羅訳とされる。巻十、十一について費長房は訳者を考訂していない。智昇は費長房の説を継承し、無批判に『大灌頂経』十二巻を帛尸梨蜜多羅訳とするが、これは一部を以て全体とみなす錯誤を犯すものである。それにも拘わらず、智昇の説は今なお学界に影響を及ぼしている。

筆者は先学の研究を踏まえ、本経の文献学研究を行うと共に、そこに説かれる末世における仏教儀式に対し考察を行った。筆者は『大灌頂経』を中国人僧の撰述、いわゆる疑偽経と考える。本経にみられる儀式は、末世の人民を救済する為、道教と巫道の儀式を複合し作られたものであり、克明に南北朝期の仏教と道教の交渉、及び宗教の実態を体現するものと言える。

疑偽経とする理由は、上述の目録学的考察の外、巻六『灌頂塚墓因縁四方神呪経』にみられる「三聖化導」「三聖教化」、また「三聖又過」への言及より明らかである。周知の通り「三聖化導」は中国仏教において形成、伝承されたものであり、

のであり、迦葉・光浄・月明の三菩薩が、中国で老子・孔子・顔淵の三聖となり人民を教化する、というものが広く知られるが、巻六にみられる「三聖又過」は末世における「三聖化導」の新たな発展と言える。

更に重要なのは、経文を整理することにより、偽経作成の痕跡を見つけたことである。第一は、本経が段階を経て形成された証拠である。巻六『灌頂塚墓因縁四方神呪経』の「我結是灌頂章句十二部要雖不同時」の記述は、全十二巻の形成が一時に行われたのではなく、且つ一人の手によって為されたことを示している。巻十二は劉宋沙門慧簡が経典より抄したものであるから、他の十一巻も慧簡の手になるものと判断できる。

第二は、神呪の典拠への言及である。巻一『灌頂七萬二千神王護比丘呪経』の「今吾所演灌頂章句十二部真实呪術、『阿含』所出、諸経雜呪」の記述は、神呪の由来が『阿含』と「諸経雜呪」であることを示している。ここで言う『阿含』とは『大会経』等にもみられる呪語を指し、「諸経雜呪」とは『呪毒経』『呪時氣病経』等にもみられる呪語を指している。『大灌頂経』はそれらをほぼそのまま用いつつ、一定の形式と目的を持って編集されている。この点より言えば、『大灌頂経』は完全な偽経であり、密教経典とみなすことはできない。

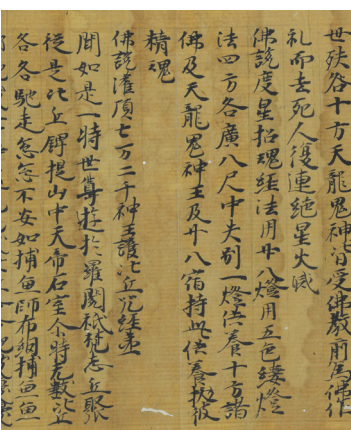
## 二、日本古写経を用いた『大灌頂経』の研究

日本古写経と『大灌頂経』という観点より論ずれば、日本古写経である『清浄法行経』と『毘羅三昧経』は、『大灌頂経』が偽経である証拠を提供するものであり、『灌頂度星招魂断絶復連経』と『大灌頂経』が連続して書写されていることは、完全な

る仏教儀式の必要より生じたものであると言える。『清浄法行経』は偽経であるとして、智昇が『開元録』より削除した後、次第に散逸していった。前述の通り、三聖教化の逸文は多くの書に認められるが、名古屋の七寺より発見された『清浄法行経』残巻はまとまった三聖化導の内容を留めており、『大灌頂経』を偽経とする堅実な証左と言える。

『毘羅三昧経』は早くに道安の経録に著され、偽経と判定されたものの一つである。この経は後世の蔵経には収録されなかったが、『清浄法行経』同様、七寺で発見された。そこには、釈印の家人の多くが病死するが、白衣居士が来て『毘羅三昧経』を誦えると病鬼は懼れ、病は癒えた、との内容がみられる。『大灌頂経』巻九『召五方龍王撰疫毒神呪経』には同内容が認められ、それは『毘羅三昧経』を「召龍神呪」に、居士の名「求若仙」を音の近い「求若先」に変えたに過ぎない。巻九は『毘羅三昧経』を改編したものであり、そこからは改編者の宗教的理想を伺うことができる。

京都興聖寺所蔵の平安時代写『大灌頂経』は、『興聖寺一切経調査報告書』によれば巻一主題を『仏説灌頂度星招魂断絶復連経』(以下、度星経)とし、入蔵本『大灌頂経』巻一の経名「仏説灌頂七萬二千神王護比丘呪経」とは異なる。本古写経を調査することで、『度星経』が『大灌頂経』巻一



興聖寺蔵『大灌頂経』巻一『度星経』に続けて書写される。

## 日本古寫經善本叢刊第六輯

### 『金剛寺藏 寶篋印陀羅尼經』

それはいかなる経緯で書写されたのか。奇しくも見いだされた各々の古写経に、それぞれに育まれた個別の歴史があることはいまでもない。詳細な経典本文の研究の先に、その幾ばくかの片鱗を見いだすことはできないか。河内長野の古刹、天野山金剛寺に伝来する二本の『宝篋印陀羅尼経』を披見し、『日本古写経善本叢刊』の第六輯として公刊の機を得、その要をあらためて噛みしめた。

本経は、『大正新脩大藏経』に不空訳とされる二種が江戸期の書写本を底本に収載されるが、金剛寺蔵の二本(重要文化財)は、空海請来の『三十帖策子』に代表される種の本とは異なり、経内の陀羅尼の後段に、本経による利益が具体的に説かれた増広改変の認められる種に属す。いずれも平安末から鎌倉時代初期頃までに書写された時代を遡る完本であり、善本としての価値をもつ。本叢刊では、その全貌を一覧可能にすべく、初となる全文カラーの影印に翻刻を附し、解題を加えて紹介を行った。また、二種の差異が瞭然となるよう諸本を対校するとともに、『国訳密教』に掲載のない当該種の和訳を試みに提示した。

故人にまつわる筆録(消息、和歌や今様)を料紙に仕立て、その表、或いは紙背に金泥もしくは墨書にて経が書写されるといった金剛寺本の装丁には、如來の全身舍利の功德により故人の往生が確かなものになるといっ

の前に書写されていること、巻一と巻六の内容が互いに錯綜していることが知られる。筆者はこの錯綜を単なる錯簡ではなく、意図的なものと考えている。『大灌頂経』、特に巻六『灌頂塚墓因縁四方神呪経』は、悪霊や横死した人の魂が、人に憑き危害を加えるのに対し、神呪と神王を用いて禁制することを説く。それに対し『度星経』は、穏やかな死を迎えることのできなかった人の精魂を鎮め、人に危害を加えることのないようにすることを説く。二つの経典は何れも効能があるが、両者を配合することにより、死後の霊魂の問題に対して完全な儀礼対処が可能となる。もし横死した人の魂が安穩を得たならば、家や鎮まり、再び人に憑くことはなく、さらに横死した人の魂が人に憑き危害を加えるということも無くなる。理想としてはまず『度星経』を用い亡くなった人の魂を鎮め、その後『大灌頂経』を用い、招魂されず人に危害を加える邪鬼や妖怪を禁制する。これこそが『度星経』が『大灌頂経』の前に書写された理由であり、かつ巻六の内容を巻一に改編した原因であろう。

1. 拙稿『大灌頂経研究』以『灌頂拔除過罪生死得度経』为中心。上海師範大學博士論文、二〇一〇。
2. 拙稿『道教終末論與中國佛教疑偽經之發展』以『大灌頂経』为中心、中國人民大學博士後研究報告、二〇一二。
3. 拙稿『三聖教化與三聖又過…一種宗教傳統的形與發展』、第一屆佛教與中國宗教國際研究生研討會論文。復旦大學、二〇一三年八月一日。
4. 拙稿『大灌頂経』形成及其作者考』、『華東師範大學學報』(哲社版)、二〇一一年第三期。
5. 拙稿『神咒與神王』、『大灌頂経』中的「神咒」辨析』、『文史』、二〇一二年第四期。
6. 拙稿『日本古寫經與『大灌頂経』研究』、『深圳大學學報』(入社版)、二〇一三年第四期。
7. 京都府教育委員會『興聖寺一切経調査報告書』、上林紙業株式会社、一九九八年。一〇五頁。(上杉智英 訳)

# 新刊紹介

## 日本古寫經善本叢刊第五輯

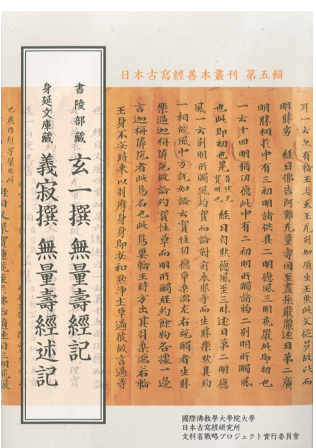
### 『書陵部藏無量壽経記』

#### 身延文庫藏無量壽経述記

本書は新羅浄土教における貴重書の影印・翻刻の紹介とそれに関する論考を収録したものです。共に『無量寿経』の注釈書で、一書は書陵部蔵玄一撰『無量寿経記』上巻(以下書陵部本)です。下巻は現存せず、現在は上巻のみが活字化されて『正統蔵経』に収録されています。これは嘉永七年(一八五四)の書写本を底本にしたものですが、これより時代が遙かに遡れる資料として、書陵部本(奈良朝写本)や、この書陵部本を丹山順芸(一七八五―一八四七)が転写した卷子本があります。そこで、これらの比較検討の作業を進めた結果、興味深いことを知り得ました。

まずは、嘉永七年本には乱丁や脱落が認められることです。次に現存諸本は全て同一箇所を欠くことより、書陵部本を祖とする伝本であると思われる、更に書陵部本には、他の諸本には見られない冒頭箇所(断簡)が七行ほど確認できることです。

従来は、本書が玄一よりも先輩である法位(七世紀)の『無量寿経義疏』を多く引用することから、全く法位に依っているとの評価しか与えられてこなかったのですが、それを見直すことによって、『無量寿経記』上巻を再評価していく契機になることでしょう。

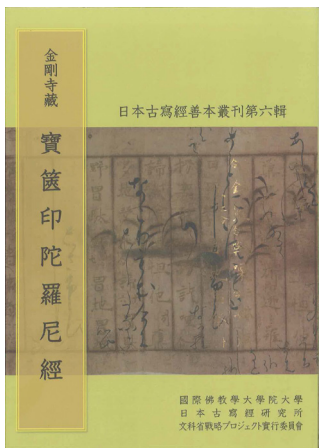


日本古寫經善本叢刊第五輯

本書は佛教大学学術奨励賞を受賞しました。

(編輯担当 南 宏信)

「法舍利」としての本経の経意が具現化されている。かの供養が格別な施主の願意によるものであることは、その贅を凝らした経巻全体に滲み出ており、後白河院政下の建春門院や八条院周辺の女院文化圏を想定し得る。



日本古寫經善本叢刊第六輯

中国において『宝篋印陀羅尼経』といえは、増広改変のない種に属す呉越王の『錢弘俶経』が専らであるが、わが国においては平安後期から鎌倉時代にかけて流行をみた増広改変のある本文が、瓦経や、東大寺南大門仁王像をはじめとする慶派仏師の仏像胎内の納入品に、また『宝物集』や『徒然草』などの中世の文芸世界に見いだされる。それらは生きた信仰として、安穩なる来世を願って書写された古写経の歴史を物語っている。經典の文献学研究による本文提示を基礎とする資料篇と、国内外の研究者が一つの經典を各々の見地から見つめて論じた七本の論放篇とを合わせて報告することで、同経を所依とする宗教思想に関わる研究が、様々な分野において進む契機となることをここに願ってやまない。

(編輯担当 小島裕子)



# 活動記録

## ワークショップ 刊本大蔵経と日本古写経

二〇一三年二月二日、韓国大真大学校より柳富鉉教授を、広島大学より佐々木勇教授をお招きし、本学においてワークショップ「刊本大蔵経と日本古写経」を開催した。発表者、及び発表題目は以下の通り（所属、役職等は開催当時の表記です）。

- 楊 婷婷（本学戦略プロジェクト研究補助員）
- 「興聖寺蔵『出三蔵記集』の系統について」
- 佐々木 勇（広島大学教授）
- 「坂東本『教行信証』引用『大集経』依拠本と親鸞の欠筆について」

楊氏は日本の古写経にみられる開宝蔵本の刊記の転写例、並びに開宝蔵本の千字文の転写例を紹介され、古写経における明確な開宝蔵本の転写例を示すと共に、興聖寺所蔵の平安末期写『出三蔵記集』を取り上げ、刊本大蔵経諸本と比較することにより、刊記、千字文の転写が認められなくとも開宝蔵本を底本とする写経が存在することを実証された。



ワークショップ「刊本大蔵経と日本古写経」

佐々木氏は親鸞『教行信証』における『大方等大集経』の引用箇所に対し、版本大蔵経本、日本の古写本と比較することで、その引用が南宋思溪版本に依るものであることを実証した上で、『教行信証』所引用箇所と思溪版本の当該箇所における欠筆の有無を照合することにより、親鸞の欠筆が思溪版欠筆の転写ではなく、北宋版、或いは南宋初・中期覆北宋版の漢籍による学習より会得したものであろうことを推定された。両氏の発表後、柳富鉉氏（大真大学校教授）より講評をいただき、日本古写経における開宝蔵の影響、受容等について、発表者、講評者、聴衆を交え活発な意見交換が行われた。

## 公開シンポジウム 宋版大蔵経研究の現在

二〇一三年一〇月五日、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）「漢字文化圏における典籍の集積、国際的伝播及びその伝承に関する実証的研究」（研究代表者：石塚晴通（北海道大学）との共催による公開シンポジウム「宋版大蔵経研究の現在」を開催した。

開宝蔵、福州版刊本大蔵経は写本大蔵経を底本として開版されたと考えられ、また日本の古写経の中には刊本大蔵経を底本とするものもある。古写経の内容を研究対象とするとき、その射程に刊本大蔵経が含有されるのは自明であるが、日本に伝存する宋版大蔵経（福州版、思溪版）の数は世界随一であり、また宋版大蔵経は仏典の一大叢書に留まらず、纏まった資料群として仏教以外にも膨大な情報量を



公開シンポジウム「宋版大蔵経研究の現在」

有するものである。そこで「漢字文化圏における典籍の集積、国際的伝播及びその伝承に関する実証的研究」と共同することで、目録、流伝、刻工、音義、系譜、経箱、料紙、字体等の多角的視点より宋版大蔵経を考察し、研究の現状を提示するという趣旨のもと、シンポジウムを共催した。

- 発表者、及び発表題目は以下の通り。
- （所属、役職等は開催当時の表記です）
- 上杉智英（本学日本古写経研究所主任研究員）
- 「後思溪蔵とは何か」
- 李際寧（中国国家図書館善本特蔵部研究員）
- 「中国国家図書館蔵『思溪蔵』概況」
- 牧野和夫（実践女子大学教授）
- 「福州版宋版大蔵経の刻工に関する問題——いわゆる「混合帖」の事例から——」
- 池田証寿（北海道大学教授）
- 「高山寺本新訳華嚴経音義と宋版大蔵経」
- 池麗梅（鶴見大学准教授）
- 「『統高僧伝』テキストの変遷——写本から刊本へ——」
- 光谷拓実（奈良文化財研究所埋蔵文化センター 客員研究員）
- 「年輪年代法による一切経箱の年代測定調査」
- 石塚晴通（北海道大学名誉教授）
- 「Codicology から見た宋版大蔵経」

当日は五〇名を超える方方にご参加をいただき、盛況のうちに終了致しました。沢山のご来臨、誠にありがとうございました。

## 公開研究会

昨年度第2回公開研究会、並びに今年度第1回公開研究会について、概要を報告致します（発表者の所属、役職等は研究会開催当時の表記です）。

○平成24年度第2回公開研究会  
平成24年11月10日（土）  
午後3時～4時半  
於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

田戸大智（本学日本古写経研究所特任研究員）

「日本中世における論議  
——身延文庫蔵『大乘義章抄』を中心に——  
本井 牧子（筑波大学助教）  
「新出の『金蔵論』敦煌本断簡」



平成24年度第2回公開研究会の様子

田戸氏は淨影寺慧遠（五三三—五九二）の著とされる『大乘義章』の諸項目に関する論議をまとめた論議書であり、東大寺内の三論宗徒による「大乘義章三十講」の内容を抄筆したものと考えられる身延文庫所蔵『大乘義章抄』について、中世にいたるまでの論議の変遷を踏まえ、それらの内容、形式と比較検証することで、講師（或いは堅者）側が質問に如何様に回答するか参照するためのテキストと推測された。

本井氏は中国北朝末期、釈道紀によって編まれた『金蔵論』について、内容と研究史を概観し、近年の敦煌写本や高麗時代のものともみられる版本を紹介された上で、新出資料としてロシア科学アカデミーサンクトペテルブルグ支所東洋学研究所所蔵の敦煌写本断簡4点が『金蔵論』の一部であること

○平成25年度第1回公開研究会  
平成25年5月18日（土）  
午後3時～4時半  
於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

室屋安孝（ライプツィヒ大学研究員）

「金剛寺本『方便心論』について」

山野千恵子（本学日本古写経研究所非常勤研究員）

「テキスト校訂の理論  
——仏教テキストの校訂——」

室屋氏はクシャーナ朝からグプタ朝前半にかけて形成されたインド仏教の初期の論証学・論理学を体系的に伝える漢訳『方便心論』の金剛寺蔵古写本に対し、Paul Massとその系譜が刊本大蔵経本とは異なり、古形を保持する可能性を有するものであって、本文の確定に有用であることを事例を呈示し論じられた。

山野氏はChaim Milikowskyの説により、テキストとは何かを論じ、校訂テキストとは何かの再現や復元でなく、校訂者によって再構成されたテキストに他ならないことを踏まえた上で、仏教テキストの校訂方法としてサンسكريット文献、漢語文献の差違に焦点をあて解説すると共に、デジタル時代におけるテキスト校訂の意義について言及された。



平成25年度第1回公開研究会の様子

24年度第2回公開研究会、25年度第1回公開研究会ともに、多数のご来場を賜り、誠にありがとうございました。今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（上杉智英）